

---

# 時報

---

No.1

1950.1

雨飾東南稜

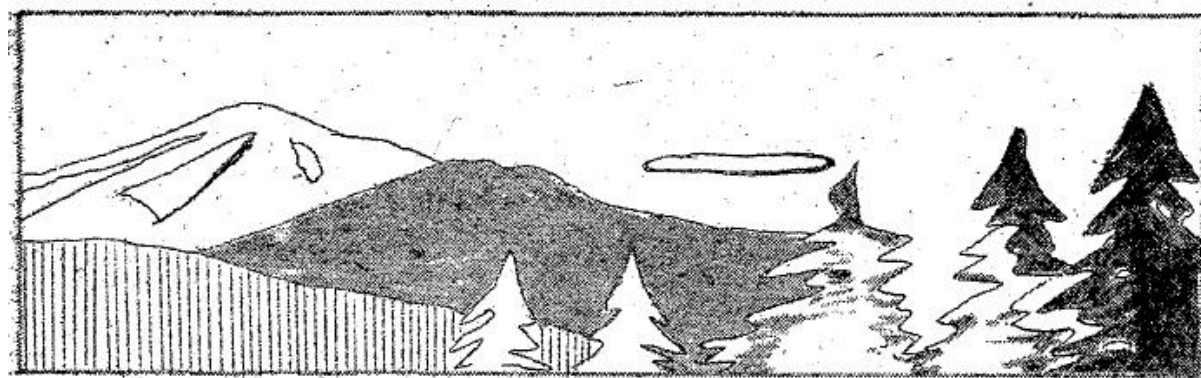
劔澤合宿

北岳バットレス

嚴冬期の白馬主稜

大阪大學山岳會

# 大阪大學山岳会報告（一九五〇・一月）



卷頭言

雨飾東南稜

一九四九・四月

劔澤合宿

〃 八月

北岳バットレス

〃 十一月

嚴冬期の白馬主稜

一九五〇・一月

会の活動記録

一九四九・四月——一九五〇一月

冬山行動表

会長 篠田軍治

大島輝夫

家田千尋

加藤幹太

徳永篤司

編輯後記

# 時報第一号に寄せて

会長 篠田 軍治

過去の阪大は幾多の優秀な部員を出してはいるが、全体としての纏まった行動にはあまり大きな足跡を残していない。併しこれは阪大の山岳部員が山岳界に何等の貢献をしていないということの意味しない。或は学連の事業に或は出身校の後輩の育成に隠れた業績は多々ある。唯学内に於て新人を養成したり、学校単位での大きな行動のようなものだけが活動の対象であると、部の存在意義を狭い意味にとるならば活動は明かに不活潑なものであったと言えよう。

併し新制大学が発足してみると従来のような行き方は許されなくなった。初年度の入学者は新制高校の卒業生と旧制高校の第一学年の修了者とである。今までのような旧制高校三ヶ年を終えた者だけの集りと違ったものになっただけに、その行き方も当然違ったものでなければならない。旧制高校でやっていたようなことも勿論必要になって来て、今までのような外国の大学クラブ式の行き方で納まりかえっているわけにはゆかない。他面、今まで理科系学部では漸く纏まりが出来てこれからという時には卒業研究や何かで色々な行動上の障害にぶつかり、高校では直結する学部がないだけに漸く動けるようになった時分にはもう卒業して分散してしまうという悩みがあったが、これは大体に於て解消したものと言えよう。こゝまで述べて来て、阪大には北校（浪高）南校（大校）が教養部及び法経学部、文学部（浪高内）の二学部として生れ出たことを附加すれば阪大山岳会という全体的な組織が出来上がるべきであり又如何なる性格のものである別に取り立てて説明しなくても、O.B.の諸氏にも理解してもらえることゝ思う。併しこの機会に戦争末期から今までの経過を記述しておくことも無意味なことではないであろう。

戦争の末期、学風会が報国団式なものに改組され各学部会が無くなって山岳部も鍛錬本部内の行軍山岳部の形で一本のものになったが、勿論本来の行動はするに由なく僅かに年一回の強歩大会を主催したり、燈火管制下でさゝやかな山の集いを時々催して山やスキーを語り合う程度のことしか出来なかった。戦災や疎開の慌しさの中に失われた資材も少くはなかった。当時自分はポツダム宣言の内容を疎開先で死んだ義父を弔った時、地方新聞で知って霧の中に始めて尾根が見えたような氣持を味わうことが出来た。併し、それは長い長い尾根であるように思われた。それでも終戦という悲しい現実の中に遠く困難なものには違いないが、ルートがはっきりと見えて来たことは何物にも換え難い喜びであった。それは、寒さは段々に酷し

くなつては来たが夜明けまでには、あと何時間、もう大丈夫というあの氣持であった。併し部の再建は中々捗らなかつた。阪大には学徒出陣が無かつただけに旧部員の復員を期待するわけにはゆかない。兎に角、出来ることからやってゆかなければならないので二十一年の秋から細野のスキー合宿を計画して、その冬に曲がりなりにも実行に移すことが出来て、第一回の神鍋の大会で優勝し、最終回戦技スキー大会という名で行われた時にも有終の美をなすことの出来た伝統あるスキーを復活することの出来たのは、友田君はじめ熱心な部員の献身的な働きによるものである。

こうしてスキーの方は再建の第一歩を踏み出すことが出来たが、山の方はスキーのように纏まつた行動をしなくても曲がりなりにも山行が出来るだけに軌道に乗るには案外手間取つた。工学部で戦後最初の夏山報告会を催せたのは二十三年であつたが、まだまだ内容的には乏しいものであつた。従来とても、又とない名コンビを形成すべき筈の人間が卒業まで全く知らずに過ごしてしまつた例は多い。こうした苦い経験が又も繰返されそうな状態にあつた矢先、徳永、大島両君の春山での初顔合せが全く偶然なことで行われた。出身校も学部も学年も違つていたので全く顔見知りでなかつた者同志が同じ阪大であるという綱で固く結ばれた時、ここに部の再建というよりは建設の第一歩がはつきりと踏み出されたのであつた。

だから会の実質は発会式以前に出来ていて、実際の活動も二十四年春の雨飾行を最初と見るべきである。そして思い掛けなく予期以上の新入部員を得て、会の外觀も整えることが出来たのである。報告に現われているように今までの経過は順調にすくすくと伸びて来たと言えよう。併しそれだけに來るべき今後の試練に対して十分な覚悟が必要である。今後も出来るだけ記録を纏めて、反省検討に資したいと思う。

戦後の学校山岳部の動きは大体に於て戦前の復習であると言って差支ないかと思う。これも大体曲がりなりにも終つたような觀がある。阪大も、新制大学の方のトレーニングは九月から始めたばかりであるが、会の動きもこの冬山で一つのピリオドを打つたものと考えられる。学生山岳界と同調して阪大も一つの転機に立っているわけである。昭和八年、入浜氏の後を受けて阪大編入直前の現工学部の前身、大阪工大の山岳部に自分の關係した当時もやはり一つの転機であつた。冬の滝谷、屏風岩も一応片付いてこれからは当時の言葉で言えば「長い尾根をビバックしながらキャンプを進めて行く行き方」だけしか残っていないように思われていた。併しこれはあまりにも狭い考え方でもう少し自由な考え方をしていたら、スケールの小さい部でも、もっと違つた行き方あつた筈である。今違つた条件下で同じような転機に再会して当時のことがまざまざと思い出されるのである。

# 春の雨飾東南稜

大島輝夫

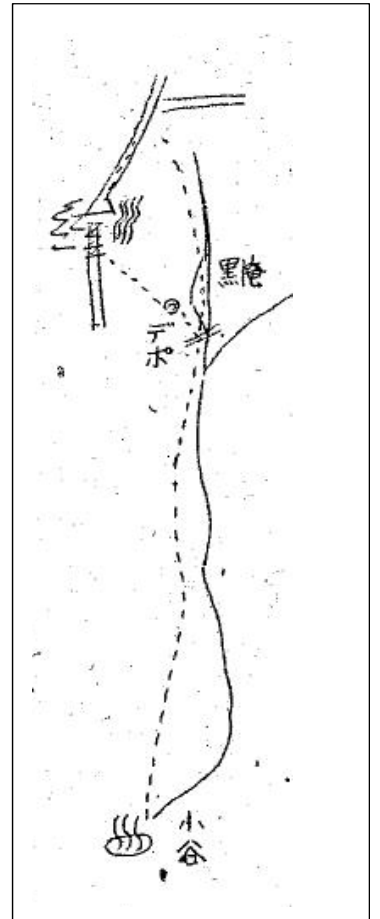
四十九年春は我々の山岳会も未だ正式に発足していず、春山へ行くメンバーは徳永と私の二人だけだった。私は正月に手術をし、三月には入学試験を受けたばかりだったので、長い計画には余り体力に自信がなく、結局西岡一雄氏よりかねてお聞きしていた雨飾東南稜へ徳永を引張ることにした。此处で「雨飾」なる人の余り知らぬ山について解説しよう。大糸南線中上より三里小谷温泉の北方新潟縣境に在り高度千九百六十米、谷川岳より高い。白馬方面より見るとむしろ可愛い山であるが、東より仰ぐと威圧的である。東と南に岩壁をめぐらし、その間に東南稜が頂上近くに岩峯とナイフエッチを持ってはり出している。雨飾への一般ルートは頂上北側で傾斜はゆるいが日本海よりの烈風が直接吹きつけて蒼水になることもあると聞いた。

此の山について最初に書いた近代登山家は大島亮吉氏であろう。登高行二号(P141)によると「マッターホルンの如き怪偉な姿をして聳立する巨人の如き豪壮な山の姿を見た。その絶嶺近くは雪も積りえない程の凄愴な急崖となって黝い岩壁を露出している…」と書いてある。その後水野祥太郎氏が東南稜を偵察され、(R.C.C.報告 2)西岡氏等が春、北面より頂上に登られた(R.C.C.3 及び泉をきく)。他に三田尾松太郎氏(幽山秘峽)や深田久彌氏の夏の紀行があるが、東面の寫眞はどれにもない。又東南稜は夏も積雪期も登った記録は無いと思う。

四月三日。晴後雨。テント等全装備を持って小谷入り。夕方上へスキーで出かけたが、視界悪くみぞれの降る中を帰った。

四日。晴後小雪。五時起床。雨の音に寝て又目を覚すと青空が見えるのであわてて八時にスキーで出発した。十時半黒俺の左側を登ると始めて主峯の全容に接した。尚もスキーで登る中に天候悪化し、頂上が見えなくなった。右から沢が入っている所で晝食(十一・三〇)を食べる中に我々もガスに包まれ、時々風が雪をたゞきつけるがとにかく岩場迫行く事にしてスキーをデポし十二・三〇出発した。靴の儘で表層雪崩のデブリをこえ左側の斜面を東南稜目がけて登り出すと大体膝迄もぐり、次第に傾斜が急になりとうとう尾根の上へ出た。依然視界はきかぬが、尾根が相当やせ

ているので岩峯に近いらしい。とにかくこの天候では登れぬから雪底の根元に出来た穴に入って休んでいると、幸運にも時々青空が見え出したのでアイゼンをつけて出かける。(十四・三〇-十五・〇〇) すぐに岩場となり二十五米のザイルでアンザイレン。徳永トップ。岩に硬雪のついた悪場をロックハーケン三本を使って約二十米登り狭い所で〇を確保。此处に約五十分かゝった。次の短いピッチで岩稜の上の三人位立てる所に出た。反対側を見下すと絶壁で下は見えない。第三ピッチはやゝ岩がかぶっているので、ハーケン2本を使って左側寄りに登り、岩峯の上に立った。こゝから頂上迄はナイフエッジであるが、岩は出ていず、向って右側は絶壁で(東壁になる)左側は雪の急斜面が遥か下迄続いている。確保してナイフエッジの左側斜面の方を慎重に進む。試みに靴で稜の上の所をけりこむとぽかっと崩れて穴があき反対側がすっと見える。最後に傾斜の少し急な所を登り切ると、頂上だ



った。(十七・十五) 天候は全く良くなり夕陽に焼山が白煙を出して輝いている。遅いので休む間もなくザイルをとき、北側斜面を下り、肩を過ぎてから、適当にデポの見当をつけて、膝迄もぐりながら尾根を下った。デポ(十八・二〇-十八・四〇) 黒滝(十九・二〇) 川を離れて台地迄登る所でシールを又つけるのが面倒なので、かついで靴でラッセルして上ったら全くへばった。上の平でわかんの跡を見つけスキーは重いばかりなので、立てて残し、温泉へ十一時過ぎに帰った。スキーは翌日取りに行った。

雨飾は一日行程の山としてすぐれた山であると思う。

# 劔澤合宿

家田千尋

夏山劔 三、四峯フェイス (長次郎側)

六峯フェイス (三ノ窓側)

チンネ (京大ルート)

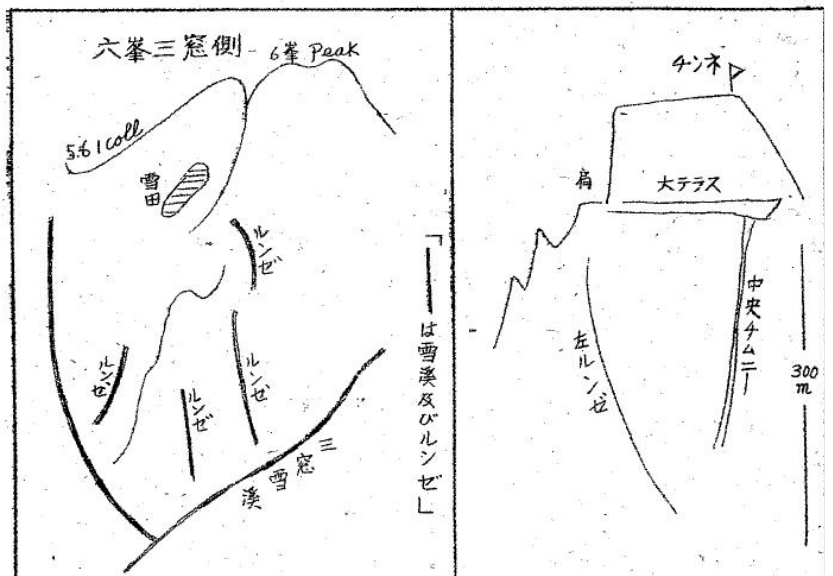
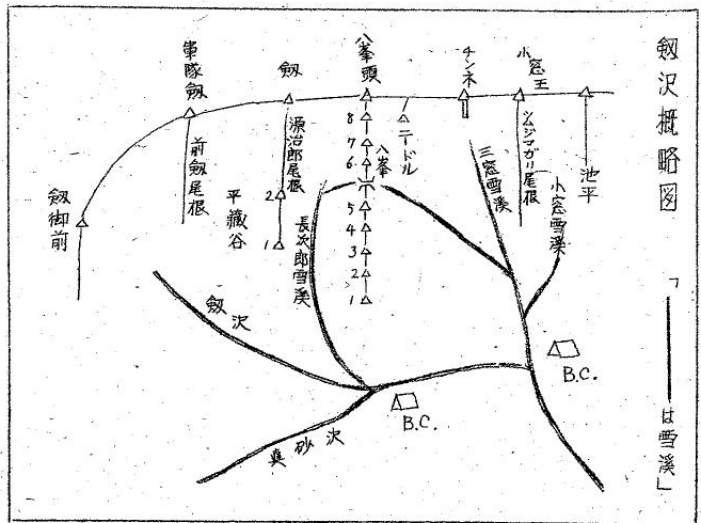
大島、加藤、家田

八月三日、B.C を眞砂沢出合に設置し、源次郎尾根、八峯上半を終えて白馬に廻る佐江木、山佐、藤谷、神川を八月六日に送り、上記三名を以て、七日より十一日 追ヴァリエーションルートとしてのフェイス登攀を行った。

八月七日、三、四峯フェイス 長次郎側

B.C ○八〇〇発劔沢を廻り長次郎雪溪に入る。長次郎岩小屋のすぐ下の雪溪を右

に上り大きなクレヴァースを避けてそのまま左の岩場にとりついた。こゝで四十米のザイルをつけて三ピッチをごく軽くすぎ灌木と草付の間に少しづゝ出ている岩場を撰ってコンテナヤスに上った。この辺は下から見た程のすごさは全然なく直射日光と草いきれにむされ途中わづかの岩影で息をつなぐも2度3度いつのまにか最後の岩壁に来ている。花崗岩の傾斜のゆるいスラブでゴム裏の感触が何とも云えず気持ちよくスリップの危険などは毛頭ない。ピーク 追百米位の岩壁が続いているがこゝをコンテナヤスをおりまぜて直接に三峯めがけて一



氣にかけ上がった。尾根筋から見る剣の姿は全くすばらしい。日光に照りはえて岩が交互に陰影を作り合いくろがねの偉大な建造物の様な感じだ。尾根筋には十一時頃に着き晝食後三、四峯コルの草付と偃松の中を長次郎側に四峯の最後のフェイスにとりつくべく二百米程をはい下った。こゝも三峯フェイスと同じ様なスラブであるが花崗岩の間に別の岩の幅 20 糎位の断層が入っていて、三峯フェイスよりも傾斜は大であるにも拘らずこの岩の層がスラブに斜めに上行している爲適当なホールドと足場を与えて呉れて六ピッチ程、最後は四峯の岩頭に馬乗りになって再び尾根筋へ出るこの三、四峯フェイスは極く簡単で特別につけるべきルートもなくスラブなるが故にどこからでも取付ける。

四峯は三窓側をアップザイレンで下る少し面白い懸垂である。五峯の長次郎側を下って、五、六の大キレットからグリセードで長次郎雪溪へ。B.C へ帰るとまだ日は高く剣沢に映えて居た。

八月九日 チンネ

二股に移動した B.C を〇六〇〇に出発し、冷風吹きおろす三窓雪溪をコルのすぐ下から左へトラヴァースしてチンネの取付に着いたのが一〇〇〇である。こゝからは普通のルートの中央チムニーを上ったが大体四十米のザイルを三人で使って、上よりするヂッヘルセルフビレイ用のハーケンに到達するのが精一杯あった所より見て、こゝでは三十米に三人がつながるのはちょっと考えものである。

最初の一ピッチははじめが少し悪いチムニーとは云え広すぎて背中 of 全然使用出来ない普通の岩場である。それからは細くチムニーらしいが三人とも背中 of リュックを気にしながら体を半分右側の空間にふり出して下から見ているとどうも安定が悪い、それに二人で立てる足場がないのでトップに続いて 2 番、それから又トップに続いて三番と三人パーティの欠陥を暴露しながらとにかく動く時間よりもジッヘルにばかり倍の時間をくっている。それでも要所要所にはちゃんと先蹤者のビレイピンがあるので我々のハーケンは腰でガチャガチャいうばかり、ハンマーを振る所もないチムニーを斜右上に上って行き最後の一ピッチは全くフェイスの上に乗出した様な形で大テラスのすぐ下のガレ場についた。やはり想像以上に時間をくい、大テラスに着いたのが一時であった。こゝは北面にあたるので日中は全然日がささず寒くておちついて飯もくえないしするのでそのまゝ京大ルートをとるため左にトラヴァースをしそこを少し下って最左の岩稜にとりつき陽光をあびて飯を喰い終わると暖くて変に睡氣をもよおした。そこから更に左に出てニードルに対面するフェ



イスを斜め上り主尾根に出んとしたが意外に悪く、天候も悪化して來たりして予想以上に時間を喰って居たので無理をせずそのまま左方大ルンゼを下った。こゝは簡単でわづか二ピッチで、いつのまにかかゝったガスの渦巻く中を朝の取付地点に出、そのままグリセードをとばして二股にかえった。B.C着は一八三〇であった。

#### 八月十一日 六峯フェイス三窓側

B.C〇八二〇出発三窓雪溪と五・六キレットより出ている雪溪の合流点のすぐ上の取付に一〇一五着、すぐにアンザイレンしたがこの所の約百米上がガレてゐて、そこからの落石の跡が白く岩の上に無数に残っている。すこぶる氣持の悪い所である。取付から少し左へ 2 ピッチ足場少く摩擦を利用する。そこからコンテナスで小さいルンゼに入るがこゝも落石多く浮き石になっている。ルンゼがかぶって少し悪いのでチッヘルするのがたよりない。このルンゼを 2 ピッチ、それからルンゼを離れて右上にはい上がり百合のはえた氣持のよい草付をどんどん上ってから再び左に巻き、チムニー状の左のフェイスを一ピッチ、それから草付、スラブを経て、偃松を腕力で強引に上り、六峯のピークの見える草付に出た。こゝで晝食をし、一三・一五発この頃より積乱雲におゝわれ夕立を思わせる。更に左のリッチの偃松をこぐと、次第にやせてその左は大きなルンゼとなって落ちている。このルンゼは大キレットからの雪溪に続いているのがこの最後の所はとても上れない程に悪い。丁度このルンゼと、先に上って來たフェイスの右にあるルンゼとが集って來ている頭にあるやせ尾根を少し下り右側のルンゼの続きのガリーにまわり込んだ。傾斜は相当で雨でも降れば完全に滝なる所である。こゝをコンテナスで梯子を昇る如くすぎる。上は草付（一四・三〇）左へまいて六峯下の雪溪に出、チョロチョロ流れる水に渴をうるおした。この雪溪の横の岩場はコンテナスで六峯のピークへ一五・一〇に到達した。天候は更に悪化して今にも泣き出し相なので急いで五、六の科尔へ下ったが、科尔へついた途端長次郎の方から大粒の夕立がやって來た。白く煙る雨中をアイゼンをつけてクレヴァースの大きき口を開く雪溪を右に左に割れ目をさけながら二股に下った。

# 新雪の北岳

## —バットレス第二尾根登攀—

加藤 幹 太

今夏劔岳の岩場と取組んだ我々阪大山岳部員は十一月上旬の秋休を利用して、次の三パーティに分れて新雪の白衣に包まれた山々に逞しい足跡を印した。その一は御嶽、第二は木曾駒、第三が我々の北岳である。始めて入る南アルプス、而も積雪季の北岳を狙いあわよくばバットレスを登って見度いというのが我々の希望であり、幾分無謀に近かったが、快晴に恵まれて第二尾根を登り得たのは幸甚であった。

此の期間中我々の根據地とした野呂川広河原の小舎は今年八月下旬、地元菅原山岳会の手によって新設されたばかりのもので、茲にその好意を厚く感謝するものである。以下に其報告を記して見よう。

隊員            徳永篤司 松久 博  
                 小澤逞夫 加藤幹太

十月二十九日

大阪発中央線茅野に向う。

十月三十日

早朝茅野に着く。八ヶ岳の白雪とその麓の紅葉とが見事なコンビをなして、如何にも秋の高山らしい味を見せている。然し此の朝の寒さはひしひしと身に迫るものがあつた。バスに乗って杖突峠を越え高遠に出る。この峠は素晴らしい眺望を見せて呉れる。高遠で伊那里行のバスに乗り換え戸台口で下車する。茲で米を買い、重くなったリュックを背負って第一歩を踏み出したがしばらく行くと材木運搬用のガソリンカーの停車しているのが見え、早速これに便乗させて貰って戸台迄突走る事が出来た。途中仙丈岳が雪を戴いて山あい姿を見せ我々の闘志をそゝる様であつた。偶然同乗していた竹沢長衛氏に遭い今秋の積雪の多い事を聞き前途多難なるを思わせる。戸台着は午後一時、こゝより北沢小舎迄約 5 時間かゝるとの事であるが行く事にして戸台川に沿って歩き出す。右岸に沿って小一時間進んだ所に最後の人家があつた。こゝの主人は石灰を採取して暮らしている様であるが非常に親切な人で、今から北沢峠迄は未だ遠いし天気も悪くなるから泊って行ってはどうかとの事で

我々も後に備えて力をセーブするために好意に甘えて泊めて頂いた。この荒涼たる谷に住み畠を作り山羊を飼い三人の子弟を養育して居られる同氏の生活意慾には深く感心させられてしまった。此の日は早く寝て翌日早朝に出発する事にする。

十月三十一日（晴） 戸台－北沢峠－野呂川（ビバーク）

六時起床、七時出発、直ちに川を渡って左岸をつめる。昨日午後から曇で今日の天気が心配であったが好転したのは有難かった。広い河原をどんどん登っていくと左に鋸岳の岩峯が見えて来る。この辺から赤河原迄は曾って木材の運搬に使われた爲に良い道でどんどんはかどる。九時頃戸台川の二俣分岐に着く。此処から右に入って八丁坂を登れば北沢峠へ達する所である。暫く休んで煙草を喫む。四人共コンディションは良好の様で全く頼もしい。八丁坂を登り始めると今迄のゆるやかな登りと違ってずしりと肩にリュックが喰込んで中々苦しい。かさかさと落葉を踏んで無言のまゝ、喬木の林を行く四人の足音が静寂の世界に一種のリズムを形作る。秋の山はこうなくてはならない。やがて、傾斜はゆるやかになり、倒木がごろごろしている林の中へ入ると雪が現れた。愈々雪線に來たのである。高度は二千二百米位。今迄地下足袋をはいていたものも靴にはきかえ相変らず電光形の道を辿って行くとやがて北沢峠に出る。この辺は既に一尺以上の積雪で本当なら道が分りにくいのであろうが二日程前通られた長衛氏の靴跡が判然としているのでこれを辿って行くと小舎に達した。時間は午前十一時三十分である。この峠から北岳を始めて見ることが出来た。真白なドーム形の山頂が突出しているのが極めて印象的であった。縣營小舎で晝食をとり雪の上で寫眞をとる。

12時30分小舎発、これより野呂川を下ることになるが是が我々の予想外の難行で路らしき跡は殆どなく右に左に懸崖が立はだかつてやむを得ぬ渡渉の連続で全く憂うつになった。始めの中は雪があつて川幅も狭くどんどん下れたが一四時半に野呂川本流の出合に着いてからは折からの増水で身を斬る様な冷水を膝から、時には腰迄つかつての渡渉が続き遂に広河原に達せぬ中に日没に遭いビバークと決す。此の地点はやゝ広い所で左岸の岩の下に巧く寝る場所を見付けシーツを敷きシュラフに潜り込んで一夜を明したが思ったより暖かであった。此から広河原迄は3km位と思われる。日程は一日遅れた。

十一月一日（晴） ビバーク地点－広河原小舎（泊）

7時起床、簡単に朝食をすまして出発、前日の如く渡渉が続く。皆の悲痛な顔を早く渉り終って見ていると中々面白い。12時25分待望の広河原に着く。偶然二人の猟師が居て橋をかけて置いて呉れたのを渡って小舎に入る。真新しい小舎!! 登山名簿を見ると今年の八月に出来たばかり、外には河童の見事な彫刻がありユーモラスな気分になる。木の皮が山の様に積んであって焚物は豊富で全く根據地には快適であった。ゼンザイを食って景氣を付け明日は北岳へと早めに就寝した。

#### 十一月二日（晴時々曇） 小太郎尾根登攀

7時出発、小舎から直ちに林に入り大樺沢の右手をどンドン道に沿って登って行く。落葉が積って分りにくいがケルンを目当てに進む。雪線に出てから少々道に迷ったが一〇時十五分大樺小舎（白根御池小舎）に着く。前の御池の側に出てハッと驚いた。雨池尾根の盡きる所壯嚴雄大なる北岳バットレスが白雪を戴いて聳立している。来たぞという感慨しきりである。一休みして深雪の中をラッセルが始まる。ルートは右上小太郎尾根へ出るのである。高度が高まるにつれて雪の状態は悪くなって来た。即ち我々の来る前に相当量の新雪が一度にどかっと降り、それが風等のために表面一寸程だけクラストを作り下は柔い深い雪という有様でうまくゆけばもぐらず沈めば膝迄入って下りにはこのクラスト部分が脚にひっかゝって痛くて仕様がな。尾根へ出ると猛烈な風而も天氣は悪化して何も見えない。アイゼンをつけてしばらく歩いたが広河原迄帰る松久、小沢の兩名は時間も遅いので先に下る事にし、徳永、加藤は更に頂上目指して頑張ったが疲れもひどく天候益々悪いため遂に引返す。我々二人は大樺小舎に寝て翌日バットレスを狙う事にしていた。此の小舎、名前ばかりで荒廢甚しい。天井は存在するが廻りの板は殆ど無くクリスマスツリーのような木が並べてあり、床もせいぜい二人が寝る所しかない。それでもシュラフに入ると疲れてぐっすり熟睡してしまった。天氣は再び好転しつゝあった。月が出て山の背を照らす。谷から尾根へと吹上げる風の音をきくだけである。

#### 十一月三日（晴） 北岳バットレス第二尾根登攀

6時に目を覚まし快晴と知って直ちに準備サブリュックに登攀用具を入れ6時半出発。

池の側から左手の森林地帯をぬけて深雪の大樺沢に出る。こゝから腰迄入るラッセルを続け目指す岩壁下に至る迄に一時間半を要した。以下の名稱は松濤氏（岳人12号、同氏は商大部報針葉樹9号に従われたもの）のものによる事にする。取付点

はバットレス沢をつめた第二尾根直下で視界の利かない所であったが意を決して二人でアンザイレンする。アイゼンもはく。此処は岩の上に新雪が覆いかぶさりホールドも悪く傾斜も急で劈頭から難登である。然し岩に接している雪は幾分とけて氷っている様で手で掴まってもなかなか崩れはしない。約 3 ピッチで一寸したテラスに出る。此処から私は最良と思われるルートを採用したつもりであるがスラブ状の岩で左手の岩との間に幅の広いチムニーの如き状態を呈していて体を後に向けたり手を突張ったりしても靴に着けたアイゼンを足場に体重をかける事は非常に困難で一時は動けなくて途方に呉れた。実際はこゝでハーケンを当然打たねばならない所であったが強引に登ってほっとする間もなく今度はぞっとする様なトラヴァース、更に上へとよち登るとやっと息をつく所に出る。この一ピッチが前後を通じて最大の難関で時間も三十分位かゝった。こゝからは視界が開けて第四尾根も見える様になる。さして難しくない山稜を喘ぎ乍ら辿って行く。天気は絶好であるが下からの烈風は物凄い時がある。松久君のパーティが小太郎尾根を登っている筈だが全然見えない。雪は余りもぐらず<sup>はかど</sup> 抄る様であるが時計を見ると既に十一時である。やがて右下にルンゼが見えてその上部を右へ少し捲いて尾根の上に出る。こゝで乾パンとジャムで晝食（十一時半）を取り暫く休む。上を眺めてはルートを考えるが直ぐ上に大きな独立岩峯が二つ並んでいる。あそこはどうして行けるだろうかと考えても行って見なければ分らない。私は行けない場合を考えて、その時には岩の下の中の狭い雪のついたテラスをトラヴァースして第一尾根へ取付くより他なしと思っていた。これも頗る困難であるが今来たルートを下る事は到底不可能であるから止むを得ないのである。食後此のナイフリッジをつめると一段下に切込んでいる所がある。直接下れないので手前からピッケル頼りに腹を捲き乍ら下ってコルに出た。更に深雪の斜面を登って岩峯の下に出た時驚喜した事には左右の岩の間がガリーになっていて三十米程続きその上は雪の斜面で第一尾根が見える。百米下から見た時かくれて見えないこのガリーの存在が我々に登攀可能の確信を抱かせた。徳永が先にコンテナスでぐんぐん登って遂に第一尾根と合流す、ラッセルは辛いが勇氣百倍である。こゝからは雪も相当締ってくるがその雪の広い斜面の距離は相当長い。稜線が見える頃には疲労のためか速度はずっと遅れた。然し遂に p.m 四時少し前に我々は稜線へ出た。敢闘 9 時間半のアルバイトの後のこの氣分に酔う我々の目に映る周囲の自然の美しさは何という感激を我々に与えた事だろう。白銀の北アルプスを遠景に中央アルプス八岳富士をめぐらす圧倒的景観は此のバットレス登攀の終幕を飾るにふさわしいものであった。頂上には松久、小沢両君の足跡があり彼らの成功も

我々の胸に大いなる喜びを與えた。p.m 四時半成功の喜びを語り乍ら小太郎尾根を下る。大樺についたのは五時半の日没寸前であったが懐中電燈をつけて広河原へ下る。先に帰ったパーティと広河原で顔を合せたのは p.m 九時である。脚はがくがくし手に傷を負った我々を迎えて呉れた松久君等の行爲が身に沁みて嬉しかった。明日は小舎へ滞在する事にして就寝したのは十二時を過ぎていた。夜中に雨が沛然と降り出した。

十一月四日 広河原小舎滞在（曇時々雨）

十一月五日 同右（曇時々雨）

増水のため野呂川の橋が流れ架橋したが失敗、天気も好くないため一日延期した。

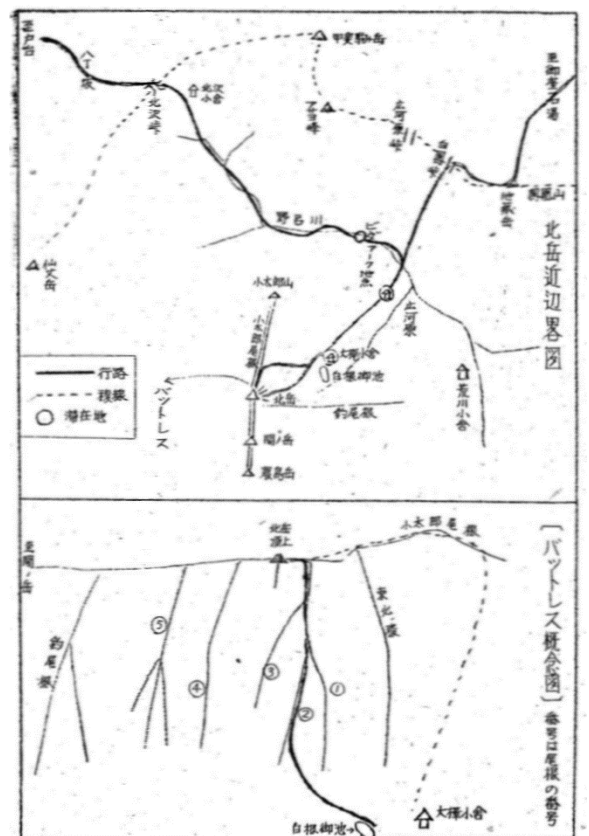
十一月六日（晴）広河原—白鳳峠—地蔵佛—御座石湯

早朝出発、白鳳峠からえらいラッセルで苦しみ地蔵から下って左の御座石へ道を取り夕方到着した。かくして今次の山行は終了したのである。

十一月七日 御座石—円井—葦崎—甲府—大阪（八日早朝）

### 附記

我々が今次の北岳バットレスを計画したのは十月半ばであり研究不足の爲バットレスの名稱・地形に関して認識の足らなかつた事が此の記録の最大欠点であるが、撮影した寫眞に依つて此の欠点は幾分補われるものと思う。殊に第二尾根は積雪季には未登攀の様であるが然りとすれば此の記録の不備なる点は遺憾であつて深くお詫びする次第である。



# 嚴冬期の白馬主稜

徳 永 篤 司

[時間的記録] 二・〇〇 北股出発—三・〇〇—三・二〇 猿倉小屋—五・〇〇 白馬尻—七・〇〇～七・二〇 スキーデポ—一〇・〇〇 アイゼン、中京山岳会と合流—一五・〇〇 二峰下、アンザイレン—一七・三〇 一峰下トラバース—一九・〇〇 雪庇下—二〇・〇〇 頂上小屋

## 記 録

### 一、第一次アタックの失敗と白馬主稜登攀の予測

われわれ阪大山岳会が一九五〇年冬期この白馬主稜を計画したとき、予め次の如き事が考慮された。

一、取付点 猿倉台地より杓子支稜の裾をまいて大雪溪に出る以上大雪溪から白馬沢よりに廻り込んで地形上の主稜末端から取付くのは傾斜の緩い長所はあるが時間的に相当なロスである。その爲には大雪溪から直接主稜の末峰めがけて横から取付くべき事。但しその附近で比較的取付けそうな処は夏季草つきとガレ場であるためナダレを考慮して日出前に稜線に出てしまわなければならない。

二、登攀時間及び隊編成 最高約十時間、テクニックよりアルバイトに向く二人より三人のパーティを必要とする。

三、降路 大雪溪、原則として頂上小屋を使用せず、などでこれは一九四八年の三月と七月、浪高山岳部として登った三合尾根と主稜の経験に基いて割り出されたものであった。第一回アタックに失敗した卅日の状況は、冬の主稜が予想以上に頑強であることを教えてくれた。

一、サポートを先頭に立て引返し可能のギリギリまでラッセルに使いアタックを温存する。

二、出発時刻を卅日の四時より早くする他に全行程のピッチを上げねばならない。

三、スキーを稜線まで上げる事。などを附加せねばならなかった。

結果から逆に見て、以上の予測はまだまだ不完全極まるものだった。相当過大に評価していたに拘らず実際の主稜はもっともっと頑強だった。所要時間も予想の倍

近く掛ったし、サポートに多くを期待するのは無理だった。更に重要な点は、われわれが餘り問題にしていなかった最後の雪庇が全く主稜初登の田中信三氏の云われる通りだったという事である。田中氏は学連報告の中で嚴冬期に於ける主稜を登攀不能なりとし雪庇の切れない事をその理由に挙げて居られる。

## 二、出発より猿倉台地まで

元日の夜細見を徹夜させ、食事の準備をする一方刻々の天候変化を観察して貰った事は非常に好かった。二日午前二時にたゞき起こされたわれわれは食事をすまして三十分後に全員外へ飛び出す事が出来た。細見は殆ど完全に出発準備をやっていた。最初一時出発をためらわせた空模様ではあったが、上につれて杓子尾根が鮮かに見え始めて来た。天候が快晴に向ったのではなく、実は猿倉台地の高度に雪の層が挟まっておりそれが原因で北股で曇り、猿倉小屋で晴になるというカラクリが判ったのはもっと后だった。所謂烈風後の晴天でない点では廿日と変わらなかったが、しかし冷え切ったように冴えた白馬の全容に初めて接する事が出来るという事が何より心を弾ませた。猿倉小屋では主稜をねらう中京山岳会は既に半時間前サポートをラッセルに送り出し出発のアタックと残留の人達が残っていた。すぐ上の猿倉台地で我々はこのサポートに追いつき先になった。廿日のときはラッセルとルートを選択に時間を食い、夜が明けてから取付いていた。台地から大雪溪まで、杓子支稜の裾をまいて幾つもの沢と隆起が折り重なっている。遠近感の不分明な夜間、これを一々気にしていたのでは時間を食うばかりである。少々の登りや下りは問題ではない。長走沢を渡ったわれわれは眞一文字に大雪溪へとトラバースを始めた。松久と久保、小沢を交代に先頭に立てゝ。約一時間後の午前五時、われわれは大雪溪の眞中に立つ事が出来た。黒々とした山影をその面に横たえて、白銀に光る巾広い帯が杓子の鞍部に上っていた。その彼方、ぽっかりと開いた稜線の窓に、氷のリンネに飾られた西の星空がチラリと覗いた。冷えびえと音もなく吹き下ろす風と共に、大雪溪の底を伝わって凍りつく夜明前の寒気が体をゆすぶった。見通せるかなり上部まで、雪面には一つのデブリもなく左手に杓子尾根が鋭くつき立っていた。予想した如く、直ぐ右手の一合雪溪と呼ばれる沢の横の傾斜は急ではあるがスキーで取付くに適していた。

一分の休みもなく、其の儘全員主稜側面の登行を開始した。折からトラバース・ルートにあたって、中京山岳会の携行する懐中電池が点滅して続いた。風こそないけ



れども、絶好の登攀日和が訪れ様としている事は疑いのない事実だった。それをわれわれは全く申し分のない完全さで絶好のコンディションでしっかりとつかむ事が出来たのである。全力を本日に傾倒して一どんな事があっても登り切ろう。嵐の様に心の底をかき立て、吹き荒れる情熱と感激が激しい闘志に入り交って全身を流れた。

東の空がいゝ様のない美しさに映えて、静かに一月二日の太陽が東の涯から微笑みかけた。その清々しい夜明けの陽光は、過去に於て決して報いられた事のなかったわれわれに対して、今日を逃がして他に絶対に機会のない事を教えてくれる様な明るさで照し出した。

### 三、白馬主稜

輪カンのラッセルは膝より少し上までもぐったが、冬としては良くも悪くもない雪質だった。取付きで小沢に分かれ、稜線直下のスキーデポ地でサポートの松久、久保にスキーを托した。徳永、大島、家田のアタック三名は、長い長い主稜の稜線を交代でラッセルし乍ら頂上へと出発した。振り返る太い樺の横で、一かたまりになって準備する中京山岳会の人達から離れた雪の中にわれわれを見守る松久と久保が立っていた。彼等はこれから五人分のスキーを担いで降り、飯を炊いてまた迎いに上って来なければならなかった。

松久、久保、小沢はラッセルに酷使された体で、細見は徹夜で全員の出発準備に忙殺された身で、四人共見事に晴れた得がたい今日一日をごたごとと麓でサポートに費さねばならなかった。廿日のときの引換し点でアイゼンに代えていたとき中京山岳会アタックの熊沢リーダーと鈴木氏が追いついて来られた。十時過ぎである。此処から頂上まで別に相談した訳でもなかったが何時の間にか両隊一つになって行動した。対抗して競走する他のスポーツに比し、登山に於ては協力すべき点があるだけで対抗すべき何者もない。一面識もなかった両隊が白馬主稜に対し抱き合って登る事が出来たのは登山家として無上のよろこびであった。

夏季、一面に茂った偃松スギの主稜、前半は充分に雪が乗ってふわりとした感じの急なリッチが只上り一本に延々と曲がりくねって続いているだけである。左手にあたって、雪をもつけぬ直上直下の岩稜が恐ろしい迫力でせまっていた。越右側から吹きつける風に雪煙を巻き上げる頂上の稜線が碧空を区切り、そこから真一文字に大雪溪へ一九四八年の三月浪高 O・B として登った三合尾根が岩峰を並べて立って

いた。右手には白馬以北の稜線と白馬主稜とに包まれて、白馬沢の雄大な景観が人間の介入を厳として退ぞけていた。足許の雪を巻き上げる烈風は絶えずわれわれを悩ましたが、しかし何処までもウインド・クラストの稜線は出て来ず、却って不安定な足場は粉の様に崩れた。既に引き返すという事を忘れたわれわれは一度の休憩もなく交代でラッセルを推進した。正午頃、高度から云えば遥か下、大雪溪の上部にあたって二点、頂上をめざす中京のサポートを認めて双方から呼び合う事が出来た。見返れば視野の始めから深いラッセルの跡が一本、われわれの登行を刻みつけるように延々と足許までつゞいていた。

夏季、主稜の後半部はガラガラの岩場と不安定なリッチの連続となり、ルートは三つの岩峰によってさえぎられる。頂上に接近するに従って加速度的に増加する傾斜は頂上直下の陰惨な岩場でオーバーハングを作り露出している。ルートは其処を避けて百米程の一枚板のガレ場を登りつめ、山頂標より十米程北側に出るのである。

記念すべき最後の悪場は先ず第三岩峰（かりに頂上から第一、第二…岩峰と名付ける）より始まった。そこで、われわれは六〇度の斜面に着いたパウダースノーを全部払い、岩場を出して進まねばならなくなった。汗ばんだトップとは反対に、後は頭から雪をかぶって寒氣と斗った。日没が迫った。第三峰上の稜線では折角苦心して作ったトップのラッセルを後の者は使えなかった。足場の雪がずって、登行に際して落ちるおびたゞしい雪のためにラッセルの上に同じ努力でラッセルをしなければならなかった。ナイフ・リッチを渡った第二岩峰を夏季われわれは北側をまいて荷物をつり上げた。今吹き寄せられて積った十数米の雪のためにオーバーハングは下にかくれて三分の一位をあらわしていた。こゝでアンザイレン。夏道通り右をまいたが上部に上行不能の一枚岩が二・三十米つづいているのでやむなく中止し、左側に廻り込んだ鈴木氏が熊沢氏の肩から成功した。その間三米程の高さである。日は没した。雪をかき出して登るのが一番良い方法には違いなかったが既に第二峰で日没になったわれわれにはそんな悠長な事は出来なかった。事実一々雪を拂っておれば明日の朝まで掛っても頂上へはゆけそうになかった。膝から下を足の裏の様に使って、或は両腕を雪面に突込んで登行を続行した。苦肉の策である。アイゼンの全く効かぬ岩場は危険を極めた。偃松を一本々々掘り出して辿り着いた第二岩峰直下で、正面から左手へ続くオーバーハングと右手の一枚板にわれわれは遂に行途を阻まれて了った。

頭上二・三十米に迫った頂上まで、一度スリップでもすれば絶対に助からないと思われる恐ろしい粉雪の斜面——われわれに残されたルートはそれ以外になかった。

午後七時。くずれ始めた荒天と烈風に吹きまわられて頂上直下に立った我々五名はこゝで致命的なしかも決定的な問題に直面させられてしまった。約三米の高さに大きくそり返った堅い雪と氷の城壁が、ぴつたりと完全に上方を閉ざして、いまや灰色に溶け込んだ頂上の稜線の遥か下まで切り崩せそうな、接近出来る一点とて見当らなかつた。

そこで落ちないで止っておれるギリギリの処で、左腕を壁の中につっ込んで雪を抱き、辛うじて振り上げたピッケルの上で、とても届かぬ厚い雪庇が冷たく笑っていた。くずれ落ちる雪を空しく頭からかぶるだけだった。こうなれば最早トンネルを掘るより他に方法はなかつた。約一時間の苦闘の後、全く失望したわれわれは足場に掘った穴を拡げ雪扉下の壁に五人入れる柵の様な穴をあけた。漸く訪れ始めた睡魔が、ラッセルに棉の如く疲れた体に抗すべくもない力で襲いかゝって来た。沈黙の中でくずれ落ちたいと思う五つの肉体が、何糞と立上る五つの魂と闘っていた。

「もう一度やってみよう」柵の底を足場に家田が大きくそり返って一ふりピッケルを振った。そのとき——意外にも、あまりにもあつ氣なく、ぽつかりと雪庇が口を開いたのである。退却ではなく、前方に向つて運命はその扉を開いた。苦闘する主稜登攀隊と、同時に邁進する阪大山岳会の前進に向つて。

さつとたゝきつけて来る雪を交えた烈風——八時卅分われわれは遂に頂上に立った。

#### 四、降 路

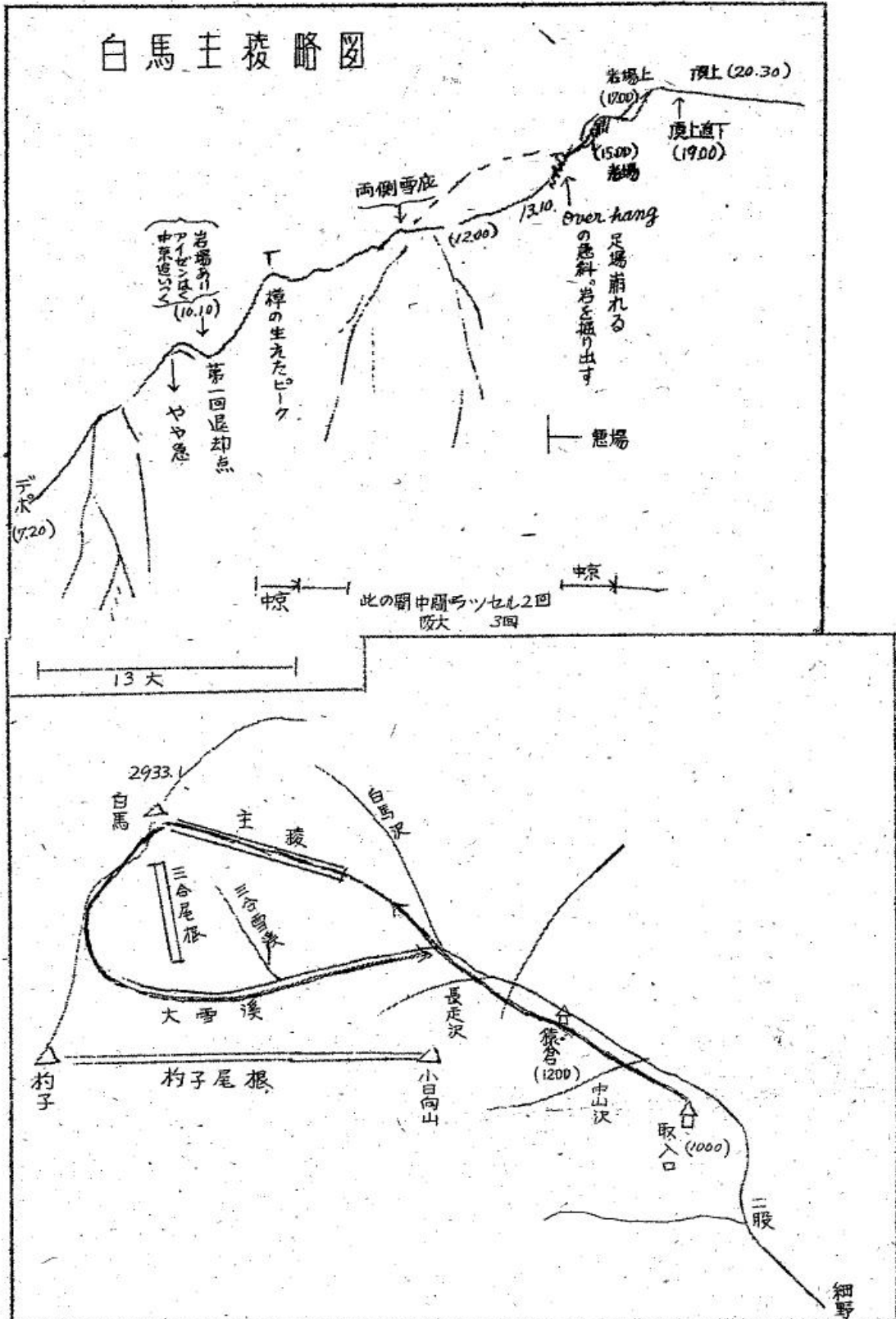
初め、本計画でわれわれは主稜自体より登頂以後の行動を慎重に取り扱つた。それは、

一、白馬山頂附近で二日間のリングをし、甚だしいものでは頂上小屋と村営小屋の間で道に迷つて遭難したという例がある様に、視界の望めぬ頂上附近は特に尾根が広くて非常に迷い易い。従つて降路には山頂標を探し出し、出来ればアンザイレンしたまま雪庇沿いに下る事が必要である。

二、降路に使う大雪溪は降雪時常に雪崩れるものと見なければならぬ。これと主稜完登後の頂上着時間とを考慮するとき、雪崩れに関しては登頂后直ちに下降し、どこか雪に閉ぢ込められる恐れのある頂上小屋は原則として使用すべきではない。

などであったが実際は全て簡単に運んだ。頂上で待機していた中京のサポートの方に小屋に抱き入れられ、暖い翌朝を山頂小屋で迎えたわれわれは、よく緊った大雪溪を真一文字に下り、三時間后には元氣に根據地に下る事が出来たのである。

一一・〇〇 頂上小屋発——大雪溪——一・〇〇 デポ地点——二・三〇 北股小屋



## 別表 No.1

=第一次・第二次アタックに於ける隊員の編成=

▽第一次（十二月三十日）

アタック 加藤、大島

サポート 家田、松久、細見

残留 徳永、久保、小沢

▽第二次（一月二日・三日）

アタック 徳永、家田、大島

サポート 松久、久保、小沢、細見

=白馬岳東面に於ける主要な記録=

一九三一・三・三一 白馬主稜 （積雪期初）神戸商大=田中・関学=秋山

一九三四・七・一七 ” （夏初）浪高=中村、河原、盛岡

一九三六・八・一 白馬三合尾根 （夏初）浪高=松井、松林

一九四八・三・二七 ” （積雪期初）浪高=佐谷、中西、徳永

一九四八・七・二九 白馬主稜 （終夏初）浪高=徳永、加藤

# 大阪大學山岳会記録

## 一九四九年度 主要記録

四月 雨飾東南稜

夏山合宿 劔東面 チンネ等

八月 穂高。木曾駒縦走。朝日白馬。

秋山十一月（新雪季）

第一班 北岳バットレス第二尾根

第二班 木曾駒

第三班 劔岳

第四班 ハッ岳

冬山合宿 細野、猿倉合宿、白馬主稜登攀

## 一九四八年

一月 遠見より鹿島鎗北壁 佐谷健吉、徳永

三月 白馬三合尾根 佐谷健吉、中西久雄、徳永

七月 白馬主稜 徳永、加藤

八月 明神最南峰中央壁 佐谷、徳永

明神最南峰南稜 家田、加藤

下又白奥壁中央ルート 佐谷、徳永

以上は浪高 OB として行ったものである。

十一月下旬

富士（関西学聯合同登山に阪大より徳永、大島、藤谷参加）

## 一九四九年

四月 雨飾南稜 徳永、大島

六月 阪大山岳会発会

## 一九四九年六月以降

○六月十九日 道場百丈岩、不動岩

篠田、伊藤、大久保、徳永、大島、家田、加藤、松久、佐江木

○七月十日 比叡→永井山横高山

久保

○七月廿八日・廿九日 道場百丈岩

大島、神川、山佐、佐江木、藤谷

△夏山 劔合宿

大島、加藤、家田、神川、山佐、佐江木、藤谷

七月卅一日 二〇・二五 大阪発酒田行

八月一日 (曇) 泊下車。十六時山崎発愛本へ

家田、神川 愛川 Camp、他は山崎泊り

八月二日 (晴) (〇五・三〇) 山崎発-愛本-宇奈月-樺平-阿曾原 (十一・〇〇)

-仙人池 (二〇・〇〇) -池の平 (二一・〇〇)

八月三日 (晴) 池平 (一〇・〇〇) -二股-真砂沢出合 (十六・〇〇) -ベースキャンプ設置

八月四日 (晴) 真砂沢 (〇九・〇〇) -小雪溪-源次郎尾根-長次郎雪溪-BC

八月五日 (晴) BC (八・〇〇) -八峯上半-劔 (一七・三〇) -BC (二一・〇〇)

八月六日 (晴) 神川、佐江木、藤谷、山佐下山

劔沢 ( ) -三田平-追分小屋前天幕

八月七日 三・四峯フェイス BC (〇八・〇〇) -三峯壁-四峯壁-五・六コル-BC (一六・〇〇)

八月八日 BC (一四・〇〇) -二股 (一五・三〇) BC 移動

八月九日 BC (〇六・〇〇) -三窓コル-チンネ直下-チムニー取付 (一〇・三〇) →大テラス (一三・〇〇) →トラバース→肩→左方ルンゼ下降 (一五・〇〇) -三窓コル (一六・〇〇) -二股

八月十日 休養

八月十一日 BC (〇八・二〇) -六峯フェイス三窓側-取付 (一〇・一五) -六峯 (一四・三〇) -五・六コル (一六・〇〇) -BC (一八・〇〇)

八月十二日 BC 撤収 (一一・〇〇) -真砂出合 (一三・〇〇) →三田平 (一六・〇〇) -地獄谷 (一八・〇〇)

八月十三日 大島下山

家田、加藤 立山へ 地獄谷 (一〇・〇〇) -立山 (一一・三〇-一一・五〇)

-地獄谷 (一二・三〇) 着 発 (一五・〇〇) -稱名 (一九・三〇) -粟巢野 (二一・〇〇)

△朝日岳、白馬 佐江木、藤谷

△穂高・槍北鎌尾根 久保他一名

七月三十一日発

八月一日 松本→上高地→横尾出合  
" 二日 涸沢天幕設置 北穂高沢滝附近で岩登り練習  
" 三日 北尾根-前穂-奥穂  
" 四日 ゾンメルシー  
" 五日 涸沢-横尾-槍殺生岩小屋泊  
" 六日 北鎌尾根-途中墜落負傷、引返す  
" 七日 下山

△木曾駒縦走 大久保、伊藤

七月三十日 大阪発

七月三十一日 木曾福島 (〇二・三〇) - 駒湯 (四・三〇) - 営林小屋泊 (十六・〇〇)

八月一日 出発 (八・一〇) - 本岳頂上 (十一・四〇) - 極楽平 (十四・〇〇) - 独沢-檜尾ノコル (十六・〇〇)

" 二日 出発 (八・四五) - 熊沢岳 (十一・三〇) - 木曾殿越 (十五・二〇) - 空木頂上 (十八・一五) - 幕営

八月三日 八・〇〇 出発-南駒 (九・三〇) - 往復-テント (十一・〇〇) - 赤穂 (二一・〇〇)

○九月一日 和賀山系久留尊山 久保

○九月二、三日 百丈岩 徳永、大島、家田、加藤、神川

○九月十八日 百丈岩 家田、北條、小沢、細見、上田

○九月廿四日、廿五日 百丈岩、不動岩

篠田、徳永、大島、家田、加藤、松久、佐江木、細見、田島、二木、小沢、馬場、赤尾氏

○東多紀アルプス 徳永、松久、家田、細見

十月八日 大阪 (一四・三五) - 丹波大山 (一六・五七) - バス-栗栖 (一七・四〇) 栗栖発 (一八・四五) - 鼓峠 (一九・〇〇) - 稜線炭焼小屋 (一九・一五) 引返し (二〇・〇〇) - 出合 (二〇・二五) - Camp (二一・〇五)

十月九日 降雨停 家田、細見 (一二・二〇) 偵察 小沢 (一二・五〇) 下山帰る。

十月十日 徳永下山 (〇九・一〇) 家田、細見、松久出発 (〇九・四〇) - 稜線 (〇九・五〇) - 三岳 (一〇・三〇) - ユーレイ峠 (一一・三〇) - 出合 (一一・五〇) - 発 (一二・四五) - 篠山 (一四・五〇)



○十月廿三日 久保 ポンポン山釋迦岳

秋山 北岳、木曾駒 御岳

○北岳 バットレス第二尾根

十月廿九日 大阪 (一五・三五) 徳永、加藤、松久、小沢

〃 卅日 茅野 (〇五・四〇) - 戸台口 (一〇・一〇) - 旬発 (一一・二〇) -  
戸台 (一二・三〇) - 白岩上島四郎宅 (一四・〇〇)

〃 卅一日 上島氏宅発 (〇六・二五) - 赤河原 (〇八・二五) - 八丁坂 (〇九・  
一七) - 北沢峠 (一一・〇〇) - 山梨縣營小屋出合 (一一・一〇) - 荒沢出合  
(一三・四〇) - 野呂川出合 (一四・三七) - 日没悪場のため岩の下でビヴァー  
ク (一七・〇〇)

十一月一日 ビヴァーク地 (〇八・一〇) - 広河原小屋 (一二・二五)

〃 二日 広河原小屋 (〇七・〇五) - 白根御池小屋 (一〇・一五) - 草スベリ  
上行-尾根にて I 徳永、加藤 Party と II 松久、小沢 Party 別れる (一三・四〇)

I 大樺小屋着 (一七・〇〇)

II 広河原小屋着 (一六・五〇)

十一月三日

I (徳永、加藤) バットレス登攀

大樺小屋 (〇六・三〇) - 第二尾根取付 (〇八・三〇) - 北岳 (一六・〇〇) -  
大樺小屋 (一七・三〇) - 広河原小屋 (二一・〇〇)

II (松久、小沢)

広河原 (〇七・三五) - 大樺小屋 (〇九・二五) - 北岳頂上 (一三・四五) - 広  
河原 (一八・三〇)

十一月四日 雨 停滞

〃 五日 雨 停滞

〃 六日 広河原 (〇七・〇〇) - 白鳳峠 (一〇・〇〇) - 賽ノ河原 (一三・四  
〇) - 鳳凰小屋 (一四・〇〇) - 御座石小屋 (一六・四〇)

十一月七日

小沢のみ中央線、他は甲府より身延線、東海道線經由

十一月八日 早朝大阪着

○木曾駒 家田、細見、田島

十月廿九日 大阪 (二三・二五)

〃 卅日 上松 (〇九・二〇) - 敬神滝 (一二・一五) - 金懸小屋 (一四・四〇)

” 卅一日 金懸 (〇八・五〇) - 遠見場 (一二・三〇) - 本岳 (一五・五五着  
一六・一五発) - 中岳小屋 (一六・二五) - 宮田小屋 (一六・五〇)

十一月一日 宮田小屋 (〇七・三五) - 宝劔 (一〇・三〇) - 偵察 - 宮田小屋 (一  
一・三〇)

十一月二日 家田、細見

宮田小屋 (〇七・三五) - 極楽平 (〇八・三〇) - 独沢岳 (一〇・一五) - コル  
(一〇・五〇) - 引返し (一一・二〇) - 宝劔 (一四・〇五) - 宮田小屋 (一四・  
三〇)

十一月三日 宮田小屋 (一〇・一五) - 本岳 (一〇・四五) - 遠見場 (一一・四五)  
- 金懸 (一三・〇五) - 敬神滝 (一五・三五) - 上松 (一七・三〇)

### 〇御岳

大島、神川、北條、二木、馬場、太田敬氏 (KO OB)

十一月二日 大阪発 (二三・二五)

十一月三日 木曾福島 (〇九・三五) - 黒沢 (一〇・四五) - 松尾滝 (一四・〇〇)  
- 四本松小屋 (一六・〇〇) - 湯川小舎

十一月四日 湯川小舎 (〇九・〇〇) - 頂上直下 (一二・〇〇) - 湯川小舎 (一四  
・三〇)

十一月五日 湯川小舎 (一〇・三〇) - 黒沢 (一五・三〇) - 福島 (一六・四五)

### △冬山 細野 猿倉合宿白馬主稜登攀

十二月廿二日 家田、細見、四宮、由比浜、田島、北條、亘、堺谷 大阪発

十二月廿三日 (晴) 細野着 スキー練習

十二月廿四日 (みぞれ) 黒菱往復、中発隊大阪発

十二月廿五日

篠田教授、徳永、加藤、大島、小沢、二木、細野着 先発八名午前四谷往復  
午後スキー

十二月廿六日 (曇) 荷上げ

徳永、家田、四宮、由比浜、細見 猿倉往復ポッカ。加藤、大島 猿倉泊り、  
夜中京五名来る。松久、久保 細野着、全員揃う。

十二月廿七日 (雪) 第二回荷上げ。馬尻偵察

加藤、大島 (六・三〇) 出発 - ラッセルしつゝ馬尻迄往復 - 猿倉 (十三・〇〇)  
- 細野

篠田、徳永、家田、松久、久保、細見、由比浜、田島 細野 (九・三〇) - 猿倉 (十四・三〇)

篠田教授、加藤、大島 猿倉 (十五・三〇) - 細野 (一八・三〇)

二木、北條、小沢 細野往復、カンパン到着。

十二月廿八日 (雪) 第三回荷上げ

加藤、大島 (十三・〇〇) - 取入口 (十五・三〇) - 猿倉 (十八・〇〇)

徳永、家田 (十八・〇〇) 猿倉 - 二股 (二〇・三〇)

日発取入口借用の交渉なす。

十二月廿九日

由比浜、田島 (九・三〇) 猿倉発 - 細野 (十三・〇〇)

家田、小沢 (十三・三〇) - 猿倉 (十六・三〇)

徳永、篠田先生見送り四谷往復

取入口小屋の許可を受く。二十三時細野発取入口へ

中京熊沢氏等猿倉着

十二月卅日 第一回攻撃 取入口移転

加藤、大島 (二・三〇) 起床

猿倉 (四・〇〇) - 馬尻 (六・三〇) - 七峯下デポ (八・〇〇) - 六峯 (十二・〇〇) 引返し - 馬尻 (十四・〇〇) - 猿倉 (十五・〇〇)

デポより中京熊沢氏等四名とラッセル交替して登ったが、新雪多量の爲はかどらず天候悪化したので退却。

松久、家田、細見 サポート、七峯 (九・一五) より引返し 猿倉 (十四・〇〇)

久保、小沢 荷下げ 猿倉 - 取入口往復

夕方全員 猿倉 - 取入口

十二月卅一日

松久、細見、小沢 細野往復

加藤 - 帰宅

一月一日 (雪)

家田、大島、久保、細見 取入口 (十一・〇〇) → 猿倉 (十三・〇〇) 中京山岳会とイグルー建設した後荷下げ 十六・〇〇発 - 取入口

明日の天気を予想し細見徹夜準備。

一月二日 晴 第二回攻撃成功 (本文参照)

徳永、家田、大島 以上アタック。松久、久保、小沢

出発 (二・〇〇) - 猿倉 - 馬尻 - デポ サポートと別れた - (十五・〇〇) - 二  
峯岩場 - 頂上 (二〇・三〇)

久保、小沢 馬尻 - 猿倉、夕方馬尻迄行き待つも帰らず夜取入口に下る。

一月三日 (曇)

徳永、家田、大島、熊沢氏等と共に下山

頂上 (十一・〇〇) - 馬尻 (十四・〇〇) - 猿倉 - 取入口 細見に馬尻で会う。

細見 サポートの爲 馬尻往復

松久、久保 猿倉台地往復、徳永等と会う。

一月四日

久保、細見 帰宅

家田、大島、松久 取入口猿倉往復 荷物全部下す

一月五日 五名 取入口 → 細野

一月六日 帰宅

冬山行動表

○Uは往復      ↑登り    Aアタック

Sはサポート    ↓下り    ススキー練習

日	細野着	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5
天候														
主要行事		黒菱往復	中発隊細野着	荷上後発到着	荷上馬尻偵察	荷上		攻撃荷下	補給	荷下	攻撃		荷下	下山
篠田教授	25		細野	ス	猿倉○	馬返○	帰宅							
徳永	25		細野	猿倉台地○	猿倉↑	↓細野	↑猿倉	↓取入口	ス	ス	A↑白馬	↓取入口	ス	↓細野
松久	26			細野	猿倉↑	ス	ス	S○↓取入口	細野U	ス	S○馬尻○	猿倉台地○	猿倉○	↓細野
家田	23	黒菱○	四谷○	猿倉台地○	猿倉↑	↓細野	↑猿倉	S○↓取入口	ス	猿倉○	A↑白馬	↓取入口	猿倉○	↓細野
加藤	25		細野四谷○	猿倉↑	馬尻○細野↓	↑猿倉	ス	A○↓取入口	帰宅					
大島	25		細野四谷○	猿倉↑	馬尻○細野↓	↑猿倉	ス	A○↓取入口	ス	猿倉○	A↑白馬	↓取入口	猿倉○	↓細野
久保	26			細野	猿倉↑	ス	ス	取入口U	ス	猿倉○	S○	猿倉○	帰宅	
細見	23	黒菱○	四谷○	猿倉○	猿倉↑	ス	ス	S○↓取入口	細野U	猿倉○	S細野U	馬尻○	帰宅	
小沢	25		細野	ス	四谷↓	ス	↑猿倉	取入口U↓	細野U	ス	S○	ス	ス	↓細野
由比浜	23	黒菱○	四谷○	猿倉○	猿倉↑	U中山沢	↓細野	ス						
四宮	23	黒菱○	四谷○	猿倉○	ス	ス	ス	ス						
田島	23	黒菱○	四谷○	四谷○	猿倉↑	U中山沢	↓細野	ス						

二木	25		細野	四谷〇	四谷〇	馬返〇	ス	帰宅						
北條	23	黒菱〇	休養	四谷〇	四谷〇	ス	ス	帰宅						
主要 宿泊地		細野	細野	細野	猿倉	猿倉	猿倉	取入口	取入口	取入口	取入口	取入口	取入口	
一部 宿泊地				猿倉	細野	細野	細野				頂上小屋			

## 冬山合宿 食料報告

先づ準備に当って予定献立表を立てて必要量を計算したが、登山中は予定献立に拘束されなかったけれども大体過不足なく合宿を終った。

主食の予定献立は総日数を全七日分として朝は餅、晝は四日カンパン三日米。夜は米とし、他にカンパン三食をアタック用とした。餅は一食二合。米は一・五合。カンパンは小麦粉三百瓦分とした。以上のみで一日約二千八百カロリーである。次に食糧の一覧を書く。

米一斗。餅一斗二升。カンパンは小麦粉四貫五百匁。メリケン粉百目。

副食。豚肉五百目。卵十個。鯨ハム四百六十匁。ハネベーコン三百匁。乾魚。ツクダニ。ソーセージ三百匁。魚の罐詰四。玉ネギ各自十個。馬鈴薯一匁。ネギ若干。乾青豆一升。味噌ハンゴ一杯。油各自一合。カレー粉2箱。ソース一本。ケチャップ一本。わかめ3束(2束余る)。粉ミルク2罐。紅茶1/4ポンド。日本茶一袋。コーヒー若干。サッカリン3箱。砂糖、塩、醤油各自少量。つけもの。みかん若干。アメ百円。バター半ポンド。ヨーカン四本。以上の中には予定表以外に個人的に持参したもの例えば罐詰等がある。ハネベーコン。ツクダニ。味噌、玉ネギは余った。アタック隊はカンパン各自三食及び三人でテルモス二本(ミルク入り)ソーセージ約百匁、バター半ポンド、ヨーカン一本、アメ若干を持参し、特にバターとヨーカンは有力であった。カンパンは約十枚(一食分)しか食わなかった。

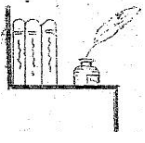
以上を総計百八十六食で消費し一食四十二円四十一銭四厘。中主食二十三円三十六銭となっている。豚肉・卵を正月用に購入し我々の今迄の登山の中では最も贅沢であったが、非常に皆を元気づけた事は確かである。(大島記)

細野猿倉の滞在日数は個人差が大きいので各自別々に支払った。その結果細野(一泊二百三十円~二百円)に長く居た者は高くついている。共同購入費は一人九百円宛となった。

一例を示すと

	細野 支払	細野 泊数	猿倉 支払	猿倉 泊数	取入口 泊数	共同費	総計	円/日
H	800円	4日	300円	3日	5泊	900円	2000円	154円
K	230円	1日	300円	3日	5泊	900円	1430円	143円

以上の外旅費約七百円がある。



## あとがき

この半年、阪大山岳会がやっと会としての体裁を整え始めてから后をかえりみると、われわれは次の事を知り得る。それは、こゝに至るまで会を育てるためにわれわれがとって来た方法は全て全く正しかったという事である。これは勿論何もかも正しいといっているのではない、登山に対する全学への啓蒙、先輩との連絡、関西学連への積極的な働きかけ、どうしてもせねばならぬ資金網の確保などの手のとゞかないまゝに放置された重要な問題が幾つも残ったし、新入会員の募集方法、指導方法、会の運営方法など決してあれで良かったとは云い得ないのである。又、われわれが氣付かなかつた大きな間違いもこの時報を読むと現れてくると思う。それにも拘らずわれわれが正しかったというのは、この半年を通じて会が決して下を向いた事がなかつた。常に前進しつゞけたという事実である。われわれはこの事を確信して一九五〇に立向い度いと思う。

▽加藤の家に泊まり込んで時報をまとめながら感じ合つた事だが、どんな山行でも必ず報告をみんなで書くようにこれから決めたいと思う。これはじっくり自分達の行動を批判して見る事の出来る唯一の方法である。初めて登攀記録なるものを書いてみてその容易ならぬと共に文章のまづいのに驚き、如何に自分達がガムチャラな登山を登り捨てにしていたかという事と、如何に狭い角度からしか山を見ていないかという事を知って恥ずかしく思つた次第である。

▽春山の計画は全員遠見一鹿島槍と決まつた。出来る限り先輩の参加をお願いしたい。この計画のためにはどうしてもラヂウス二台を購入せねばならない。現在のわれわれにはテントもカボックも何もかも足りないものばかりである。他のものは何とか足りないまゝですませよう。しかしラヂウスだけはこれがないとどうにもならないぎりぎりのものである。現在現役会員は一人残らず会費を完納している。運動部の部費など殆どアテにならない現在、この機会に会費の完納とラヂウス基金とに先輩諸氏の橋梁をお願いして止まない。

▽毎週金曜午後四時から協銀ビル三階「日本山岳会」のルームで開いている「金曜例会」は、一応軌道に乗つて殆ど現役は百分の出席率を保つ事が出来た。篠田会長を囲むこの例会だけはどんな事があつても会員全体で育て上げなければならない。この一月から、五時半までにその週の打合せなどを終え、五時半



から研究会をもつ事になった。この例会にもっとドシドシ先輩の参加を願えば有難いと思います。

▽最後に、この時報第一号をだすにあたってわれわれは感謝の気持ちで一杯である。教授という多忙な職に居られながら篠田会長はこの金曜集会の殆ど全部に出席して一々会務を指導された。北岳や白馬主稜で行動が思うまゝにならなかったとき、このことはどれだけ大きな力となり無言の激励になったか知れなかった。正直な話、われわれは子供の様な気持ちで会長に接する事が出来る美しい雰囲気恵まれたのである。

次に常に温い眼でわれわれの行動を見守っていて下さる浪高山岳部の諸先輩、特に佐谷先輩や木村先生、事ある毎に助言を頂く日本山岳会の西岡老、太田氏、睦田氏には感謝の言葉もない位である。

(一九五〇・一・一八 ルームにて徳永記)

#### 追記

本時報は時報にしては少し量の多いものになった。報告にせよという編集委員の声もあったが、報告はもっと後に改めて作り直す事にし、当初の意見通り時報第一号として出す事にした。今后、時報はもっと期間を短くして出すつもりである—大島。